

『江南春望』 杜 牧

双曲の屏風画の如し

江南春望 杜 牧

千里鶯啼緑映紅 千里鶯啼いて緑紅に映ず

水村山郭酒旗風 水村山郭酒旗の風

南朝四百八十寺 南朝四百八十寺

多少樓臺煙雨中 多少の樓臺煙雨の中

この詩は揚子江南方一帯の閑かな、しかも雄大な春景色を手にとるように絵画的にうたった作品である。この地方は山紫水明で温暖な気候と豊かな自然に恵まれており、名所史跡の多いことからわが国の京都にも比せられる。江南の風景をうたった詩は多くあるが、この作品がもつとも有名で、杜牧の代表作ともいわれる。眼前の風物を特殊な技巧を用いずに、素直にさらりと配列することによって、かえって深い味わいを感じさせ豊かな詩情をただよわせている。

作者と時代背景

杜牧については「吟詩日本一三四号」で陳べられているし、教本A号等にも記載されているので、ここでは時代背



杜甫

景と晩唐期の詩風について記すのにとどめておきたい。

晩唐期は、武宗初年の八四一年から、唐朝の滅亡する哀帝末年の九〇七年まで六代、約六十年間をいう。しかし中唐から晩

唐にかけての移行は明確にすることはできない。これは詩人の生没や詩風の変遷がかなり入りこんでいるため、文宗（八二七―八四〇年在位）のころが両者の交錯する時期である。

この時期の最大の特徴は、政治の混乱と詩人たちの政治からの離脱に見える。天子は概ね宦官かんがんによって擁立され、権力は宦官によって掌握されていた。そして官僚は進士出身系の挙子党と貴族出身系の任子党に分かれ派閥争いを激化させていた。又、地方においては藩鎮はんちんが小独立国のように振る舞い、王朝は解体寸前であった。

こうした混乱の中におかれた詩人たちは、すでに中唐の詩人のような政治に対する理想や情熱を持ち得なくなっていた。政治や社会に対する関心は、身の不遇とあいまって複雑に屈折していき、多くは個人的な抒情の世界に沈潜ちんせんしていくのである。

晩唐の代表的な詩人は、杜甫に対して小杜と呼ばれる杜牧、温李と併称される温庭筠ていゐんと李商隱の三人であるが、い

ずれも官僚社会での異端者もしくは脱落者であった。

杜牧は懐古と風流艶やかな世界に耽り、他の二人は男女の情愛を耽美的にとらえることにより、晩唐風の甘美な官能の世界をうたう詩境を展開している。

皮日休が黄巢の乱で反乱軍に参加したように、政治上の信念は文学によってよりも、直接行動によってしか表わせない暗黒の時代となって唐は滅びた。

・皮日休……晩唐の詩人、文学者。時政を憤り、生活に苦しむ庶民を詩賦に描いた。のち、黄巢軍の翰林学士となる。

・黄巢の乱…唐末、王仙芝の反乱に呼応して黄巢が指導した農民反乱。八七五年山東に蜂起し、四川を除くほぼ全土に広がる。黄巢が帝位につき国を大斉と号したが、内部分裂により八八四年鎮圧された。これにより、唐朝の権威は失墜した。

要旨

うぐいすが鳴き、花が咲き、南朝の名残の寺が煙雨にけぶる美しい江南の春景色である。

意解

(このあたり) 見渡すかぎりの一面に鶯がさえずり、(柳)

の緑に(花)の紅の色が映り合っていていかにも美しい。(かなたに)川辺の村や山ぞいの町が望まれ、酒屋の目印の旗が風にひらひら揺れている。

(思えば)南朝の時代には(仏教が栄え)多くの寺院が建立されたことだが、(今もなお)その多くの建物が、煙るような春雨の中に(ぼんやりと)眺められ、遠い昔をしのばせている。

構成

起句Ⅱ作者がたたずむ辺の春の風物が描かれ、広広とした江南地方を背景に、聴覚においてウグイスの鳴き声、視覚において柳の緑と、桃の赤い色とがとりあわせられ、季節と場所が表現の中に設定されている。

承句Ⅱはるかな眺望が展開され、遠い広がりの中に村里が長閑かな落ちつきを見せて、その視野の中にかすかに揺れ動くものをとらえている。それは酒屋の旗じるしで、春風にひるがえっている。

一転句Ⅱ前二句の春景色から一転、作者の心に南朝のころの仏教の盛んであった昔へと追憶がおよぶ。

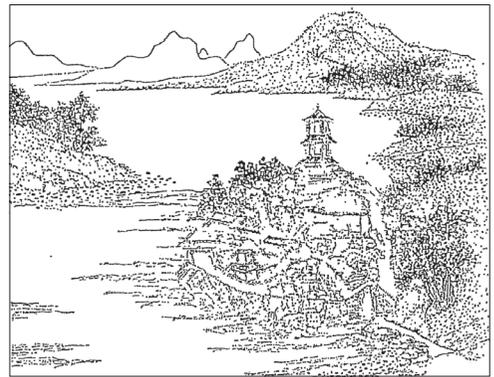
結句Ⅱこの句で作者の意識は現実にもどり、春の風景だけではなく、追憶とともに多くの寺院の堂塔が、春の情景を背景とし、春雨にけぶるといふ柔らかなしっとりとした句法で結んでいる。

鑑賞・探究

転句の「四百八十寺」は多くの寺という意味で実数ではない。この五字の画数の合計が二十一画で「南朝」の二字の画数と同数だからという説もあるが、これは偶然であるらしい。また「十」は「ジユウ」と読むと入声になり「四百八十寺」が全部仄声となり、絶句として破格になるので、沈と同音に平声で読み、「シン」と読みならわしている。

江南は、揚子江下流の南岸の地域で、今の江蘇省南部から浙江省北部にかけての地方で、江東、江左ともいう。小川が網の目のように通った水郷地帯が広がり、その中に高い山がところどころにある。温暖な気候と豊かな自然に恵まれた風光明媚な地で、都市は物産の流通する繁華の場であった。

作者は多感な青年時代を、官吏生活のふり出しとしてこの地で送っていることから、江南の風物や追憶を詠んだ詩が多い。この詩の成立年代は詳らかではないが、青春期の作の一つであろうと思われる。鮮やかな美的感覚と甘美な感傷とが詠みこまれたこの詩は、一見、江南の風物が目に入ってくるままに並べたてたようにたわれて、いうならば叙景詩である。しかし、千里の鶯の鳴き声を聞いたたり、緑や紅を見たりできるはずがないので「千里は」十里の誤りであろうとか、前半では晴れているのに後半で雨が降っ



ているのはおかしいとか議論が出て、詩趣をこわしてしまうことになる。

絶句であっても、眼前の一時の景をうたわなければならぬことはなく、反対に読む側も、晴れていたのが暫くして雨に変わったのだと時間の経過を加えて合理的に解釈する必要もない。中唐の合理性とは異なった美や詩を手段として表現したのが晚唐詩の特質であろう。

杜牧はこの詩において、江南の春を自然と文物の二点におき典型化したのだろうと見たい。江南は、目のとどかない地も総てで鶯が鳴いて、緑と花の紅の美しさにつつまれており、川辺の村も山ぞいの町の酒屋の旗が春風にはためく長閑かさ。このような大きな景色を、聴覚と視覚の両方から詠み、江南地方特有の陽光が自然の色彩にきらめく平和な春が一方にある。そして一方に宋・齊・梁・陳と南京を都に栄えた南朝の歴史と、その名残の文物がある。それらの春雨にけぶっている姿こそが、懐古の情をさそう。いわば杜牧は江南の春をあたかも双曲（起承・転結）の屏風に描き分けて、抒情を叙景の中に同化させたといえよう。

最後に、服部嵐雪（二六五四―一七〇四）の句に、この詩の承句が巧みにとり入れられているので紹介して閉じます。

「はぜ釣るや 水村山郭 酒旗の風」